

# 人間国宝 吉田文雀氏インタビュー



嬬山姥（こもちやまんば）

## 吉田 文雀 よしだ・ぶんじゃく

昭和20年、文楽座に入座。昭和25年に三代目吉田文五郎の門下となり、吉田文雀を名乗る。主役級の女形だけでなく、幅広い役を遣いこなし、作品・役に対する深い解釈から生まれる、格調ある演技は、高く評価されている。豊富な知識、経験により、昭和38年から現在に至るまで公演に遣う人形のかしらを定める「かしら割り委員」を務める。

昭和57年、国立文楽劇場第1回文楽賞大賞。平成3年、紫綬褒章（しじゅほうしょう）。同6年、重要無形文化財保持者（人間国宝）。同11年、勲四等旭日小綬章（くんよんとうきょくじつしょう）など受賞歴多数。

## 近松作品の思い出

——文雀先生が、人形遣いの道に入られて半世紀以上たつわけですが、その間に近松門左衛門の作品のなかでいろいろな役をお遣いになつておられると思います。先生が心に残っている作品や役はございますか？

**文雀** ●もう、いろいろな役をさせていたただいてますけども…。『大経師昔暦』のおさん、『鑓の権三重帷子』のおさいなどが、印象に残ってますね。もちろん『心中天の網島』は、人気のある狂言で、よく出ています。おさん、治兵衛、小はる、孫右衛門など…。

あと好きな役柄では、『長町女腹切』の半七のおぼ。自分としては、随分思いを込めて遣つたんですけどね。これは、あんまり作品そのものが評判にならなかったですがね（笑）



大経師昔暦（だいきょうじむかしごよみ）

## 近松は難しい？

— 近松の作品については、演じる側としてどのような思いを持っておられるでしょうか？

**文雀** ● 人形浄瑠璃を創生期に確立したのは近松ですし、その意味で偉大な人ですが、実は近松の作品は、我々にとっては、舞台にかけることがやりにくい。一番難しい作者です（笑）。

まずは、人形が今と違います。近松が死んでから三十年くらいたって、やっと今の「三人遣い」が始まったわけで、現代の舞台と、人形の遣い方や構造そのものが、全然違うからね。

また当時は「一人遣い」だけじゃなく、糸あやつりなんかも併用していたに違いない。『百合若大臣野守鏡』の鷹の精や、『用明天王職人鑑』の高砂の松のところなどがそうですよね。

— 「からくり」なども使っていた…。

**文雀** ● そうそう。当時は狭い限られた舞台だからできる。現代の大きな舞台上で上演するには、原作どおりできない部分がある。

また、近松はんは芝居の台本にしても、筆にまかせて書いているところがあって、文章も「字余り、字足らず」のところが結構あるんです。そのままの文章では語りにくいと思います。

近松当時の浄瑠璃は、「語り」が主体でしょ。目で見る人形は、お添えものになるわけでしょう。

—— 私たちはどうしても、文学として、読み物として近松をとらえることのほうが多いわけですが、舞台芸術としての近松は、また違う部分があるということでしょうか？

**文雀** ● 近松はんの作品は、文章的には大変なものとおっしゃるでしょうけど、演じるほうは、よっぽど心理描写など考えてやらないと舞台にならない。『女殺油地獄』でも、与兵衛が、お吉に甘えて「金貸してくれ」というのが、途中で、はつと「殺そう」という風になるところなど、同じ人形の顔で変わらないのに、殺意

を見せるといいうのは、よっぽど技術が非凡でなかったらできないことですよな。

『曾根崎心中』の堂島新地天満屋の段で、辰松八郎兵衛はどんな女形遣うてたのか。おはつが縁の下に徳兵衛を隠して、足で合図するところなんか、昔はどんなことしてたのやろかと思えますけどね。裾から手を入れて人形遣ってるのに……。このあたり、人形と語りの関係がどうだったのか、非常に興味のあるところですが、具体的な人形の遣い方については全然残ってないですからね。

## 現代に生きる者が共感できる舞台を

——そうですね。実際、江戸時代にあっても近松が亡くなってからは、彼の作品も原作どおりはあまり上演されず、改作で上演されることが多かったという事情があります。そういうわけですから、現代、近松作品を演じるときには、作り手側としてご苦労があると思うんですが……。  
**文雀** ●私どもはお客様あつての舞台ですからね。今の時代にどう表現したら、お客様に理解していただけるか、納得していただけるか、それが大切なんです。

原作が基本となることは間違いないですが、やはりいろいろの作品について、現代の若い人や京都・大阪以外の全国のお客様が見て下さって、何を言っているのかわかるように、文章を抜き差ししたり、書きかえたりすることも必要となってきます。近松作品には、言葉遊びの部分が多いでしょう？『曾根崎心中』の「観音巡り」とか。そういう筋とはあまり関係ないところをカットするとかね。

で、『曾根崎心中』も文章をわかりやすくして大成功し、その後、国内だけでなく、海外公演でも必ずヒットする作品になったんです。それを学者先生などは、「近松」とかお書きになる場合もあるんですが（笑）。

近松だつてこしらえたときは、お客様があつてこしらえたわけでしょう？お客様を喜ばせる娯楽なんですからね。現代の生活をしているお客様が見て、共感を得られるような舞台を作らなくちゃいけないんです。

お芝居を見にこられるお客様は、高い入場料払って、持って帰られるのは切符の半分だけです。芝居見て「ああ、おもしろかった」とか、「悲しかった」とか、

## 近松への招待

「あそこで心打たれた」とか、そのときはそう思われて満足してお帰りになって、それが忘れられてもなんかのときに、「そう！あのときのあれ、よかったなあ」と思うてもらえるような舞台を作らんならん、私どもは。そう思うて、一生懸命に務めさせていただいてるんですが…。

——これからも鯖江の近松ファンと一緒に、素晴らしい舞台を期待しております。今日は貴重なお話をありがとうございました。

◎対談日…平成13年8月28日

◎聞き手…福井大学教育地域科学部教授

三好修一郎（さばえ近松倶楽部顧問）

